

タイ農村のネットワーク再論

ー北タイ・ナーン県 H 村についてー

日本女子大学 尾中文哉

1.目的

本報告の目的は、一方では安田、鈴木ほかの社会学的ネットワーク分析の展開、他方では水野、北原ほかのタイ農村に関する社会学的研究の蓄積を受けてこれまで提案してきた、社会文化ネットワーク論(尾中 2015)を、別の形で提案し、実際にタイ農村の考察に生かすことである。

2.方法

方法は、筆者の実施した長期滞在調査の収集データの再分析である。筆者は 1995 年から 1997 年にかけて三つのタイ農村でそれぞれ六か月程度の調査を実施し、それらにもとづいて社会文化ネットワークという枠組みを提案してきたが、その仕方は、もっぱら文化項目や関係や村人やその集まりについての調査結果の、研究者による概括にもとづくものであった。それについて、個人インタビュー調査の内容にもとづいてデータファイルを作成し、それをネットワークソフトにかけるという仕方で行おうという趣旨である。今回は北タイ・ナーン県の H 村のデータを用い、社会的ネットワーク分析と社会文化的ネットワーク分析を行って違いをみながら考察を行う。

3.結果

それによると、まず村びと間の関係のみを記述する社会的ネットワーク分析では、概括方式で出てきた I 氏系、C 氏系という二つのまとまりがみられたが、もうひとつ他のまとまりも観察された。次に、村びと間の関係に加え、文化項目も入れてネットワーク分析する社会文化ネットワーク分析では、概括方式で出てきた二つのまとまりよりも、I 氏系及びもうひとつの人的まとまりと複合農業・伝統芸能・伝統医療・寺活動という社会文化的まとまりが非常に大きく、C 氏系は、文化項目を含まない小さめのまとまりとして現れることがわかった。

4.結論

以上のように、個人インタビュー調査の内容をデータの的に整理したうえでネットワーク分析を行うことで、ひとつに、概括方式では明確でなかったまとまりを見出すことができ、いまひとつに、概括方式とは異なる文化項目の帰属のさせ方が適切であることが明らかとなった。H 村の分析としていえば、I 氏系の影響力は、概括方式でみえるよりも強力である可能性が高いということが明らかになった。もちろん、その中で落ちてしまうものもあるわけだが、こうしたデータ整理を他の村について行うことは、プロセス志向の「厚い比較」の基礎としても有効なものと考えられる。

文献:

尾中文哉.2015.『「進学」の比較社会学ー三つのタイ農村の「地域文化」との係わりで』東京:ハーベスト社.